



# 消防職員も救急活動で感染の不安 新型コロナ最前線で働く全国の隊員らを調査 人間学部准教授がアンケート結果を記者発表

「新型コロナ流行下の救急活動に関する調査」

【研究背景】新型コロナウイルス感染拡大にあたり、消防職員は、陽性患者や感染が疑われる傷病者への対応に従事してきた。救急活動に携わる消防職員は、ファースト・レスポnderとして傷病者に最初に接触する任務を担っており、新型コロナウイルス禍において社会の機能維持のために最前線に立つ「医療行為も行うエッセンシャル・ワーカー」と位置づけられる。同じように患者と接触し対応を行う医師・看護師等の医療機関職員に関しては、感染リスクの高さや職務の負担が社会的に注目され、マスメディアに取り上げられる機会も多く、「新型コロナウイルス感染症対応従事者慰労金」が国から支給されている。その一方で、救急活動を担う消防職員には社会的関心が寄せられていない。

日時 会場	発表者
<p><b>9月8日(火)11:00</b>                      太白キャンパス 研究実験棟Ⅱ                      K261 (キャンパス地図はQRコードから)</p> 	<p>畑中美穂 本学人間学部准教授                      (社会心理学)                      松井 豊 筑波大学名誉教授                      (社会心理学)</p>
<p><b>【報道の解禁日】テレビ、ラジオ、インターネット:9月8日 17:00 / 新聞:9月9日付朝刊</b></p>	

【研究目的】新型コロナウイルスの流行によって生じた救急活動の変化と、救急活動を担う消防職員のストレスを検討し、救急現場が抱える課題を明らかにする。

【研究方法】機縁法で全国の消防職員に調査協力を呼びかけ、2204名の消防職員から回答を得た。

【主な結果】(2020年11月7-8日開催の日本社会心理学会にて発表予定)

・自分が感染する不安だけでなく、同僚、家族を感染させてしまう不安を抱えながら活動している消防職員が9割近い。感染者が多い地域では、この傾向がさらに高まり、9割強が該当。

・救急活動に携わる消防職員の声 (自由記述回答から抜粋) :

- このままでは救急隊を続けたくありません。これは沢山の救急隊の人達が思っていると思います。たださえ昼夜問わず走り回っているのに更に負担増です。現場対応をする職員にやる気を起こさせる様な組織の体制を取れるように、社会的に動いていただきたいです。もう本当に辛いです。(30代男性)
- 資器材も足りない。人員も足りない。消毒時に出勤不能になってもそれを充足するだけの車両もない。手当もない。…この状況が長期間続くのであれば、救急を下りたい人が出ても仕方ない。(20代男性)

→このほかは記者会見で発表します。